

応力降下量一定モデルと変位量一定モデルについて

(中央防災会議「東海地震に関する専門調査会」報告より抜粋)

強震波形計算による手法においては、図1のようにアスペリティを設定した。また、地震の発生過程を実際に発生しそうな以下の組み合わせの4通りで想定した。地震が発生する際に震源域の固着している部分が急激にすべり始める位置(破壊開始点)については、過去の地震発生状況等から震源域の北西側深部の中央及び西側の2通りを想定し、それぞれに対し2つのプレートの固着部分の地震発生時のずれ方(破壊様式)については、両プレートが固着している場所がすべて同じ距離だけずれる場合(変位量を一定とした場合)と、両プレートが固着している力の大きさに合わせてずれる場合(応力降下量一定とした場合)の2通りを想定した。

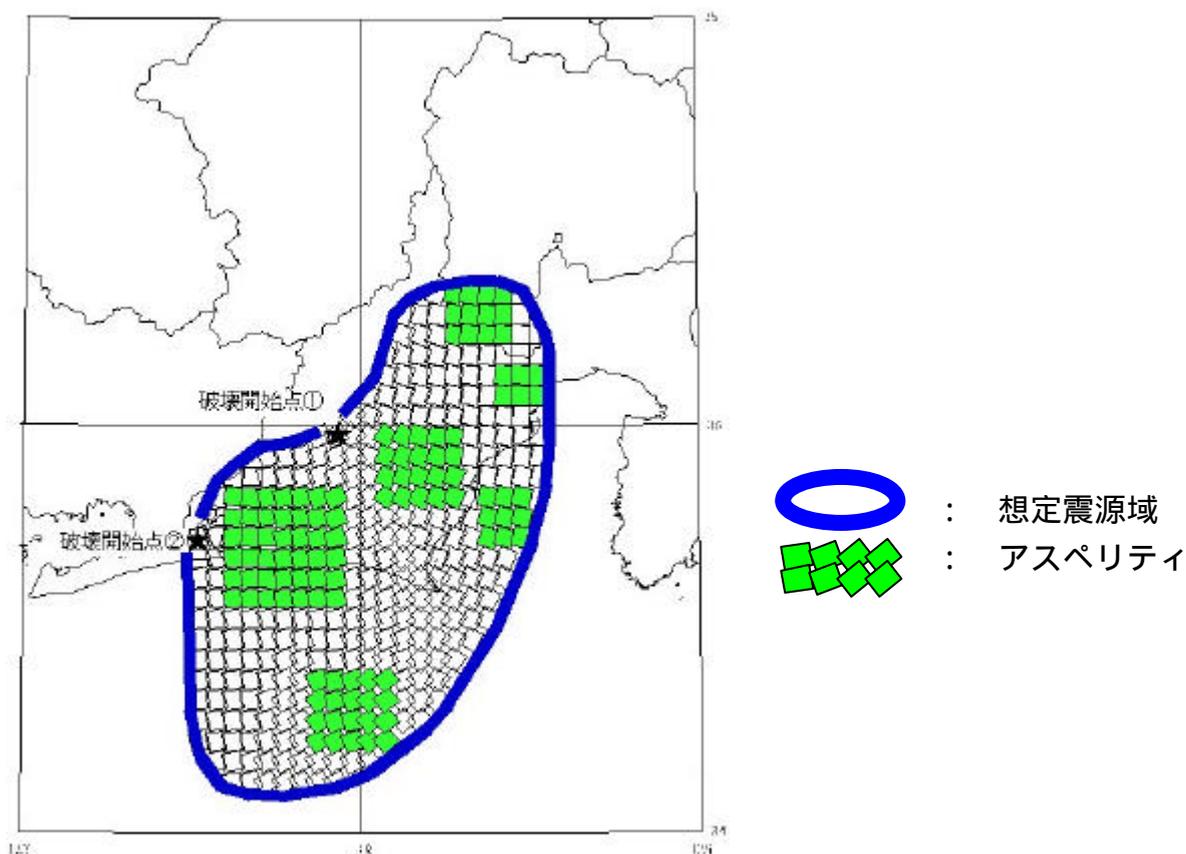


図1 想定震源域におけるアスペリティー分布および破壊開始点

アスペリティー：震源域のうち特に大きな地震動を発生させる部分